



「母」

「白隠の再来」 - 山本玄峰老師

「白隠の再来」 - 多くの人々からこう呼ばれた名僧・山本玄峰老師は、三島が誇る名刹、臨濟宗妙心寺派・円通山龍澤寺の住職を大正初期から戦後まで勤められました。龍澤寺は日本臨濟宗の中興の祖とされる白隠禪師（1685 - 1768）の開山によるもので、数々の名僧を世に送り出してきました。玄峰老師は大正4年、ちょうど50歳の時に龍澤寺へ入寺され、昭和36年に96歳で遷化されるまでの約50年間、三島や沼津において、修行と雲水の育成に励まれ、その徳は、三島・沼津近隣に多くの信者を生みました。又、全国から政治家や財界人が老師を師と仰ぎ、特に太平洋戦争終結にあたって鈴木貫太郎首相に「耐え難きを耐え忍び難きを忍び…」と提言したことはあまりにも有名です。



玄峰老師の生い立ち

山本玄峰老師は、慶応2（1866）年、和歌山県湯の峰温泉芳野屋で誕生しました。生後すぐに捨てられてしまい、たまたま通りかかった岡本善蔵に拾われたと伝えられています。この赤児は芳吉と名付けられ、地元では素封家の岡本家の後継ぎとして、厳しく養育されました。19歳の時、眼病を患い、失明の不幸に見舞われ、人生に絶望した芳吉は、投身自殺の覚悟を決めて、華嚴の滝（栃木県）へ行きますが、目的を達せられず、新潟県の出雲崎へとさまよい、行き倒れになったところを助けられました。



その後、一念発起し、四国八十八箇所の霊場を巡拝して、「はだし参り」を始め、その七回目の時、土佐三十三番札所雪蹊寺で行き倒れになりました。この時に助けられた雪蹊寺住職が、後の老師の師となる太玄和尚でした。

太玄和尚は出家心の生じてきた芳吉に向かって「親からもらった眼は老少不定で、いつの日にかは見えなくなる。しかし心の眼が一度開けばつぶれることはない。お前さんは心眼はまだ開いておらぬが、開く気になれば開く。文字を知らねば経読み坊主にはなれないかも知れぬが、通り一遍の経読み坊主なら幾らでもある。死んだつもりになってやれば、本当の坊さんになれるよ」と諭し、ここで決心し仏道に入られたといひます。

雲水の修行でも、人が寝静まった後に起き出し、線香一本の光の中、わずかな視力で经文などを読み、また夜中に一人、坐禅をされる事が何度もあったといひます。

玄峰老師は雪蹊寺、永源寺、祥福寺、宝福寺、虎溪山、円福寺と修行を重ね、住職として雪蹊寺、龍澤寺、松蔭寺、瑞泉寺、覚王山、正受庵、新京妙心寺、円福寺と渡り歩き、こうした難行苦行の末に、「白隠の再来」呼ばれるほどの高僧になりました。

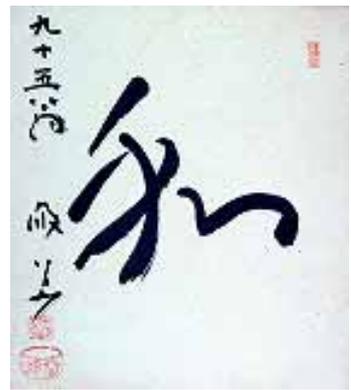
玄峰老師の書について

現在に残る遺墨は表装されたもので大正時代と言われるものが数点、ほとんどが昭和、それも戦後に書かれたものです。92歳のある朝に「やっと字が書けるようになったわい。わしの字は九十二以後のモノを見て欲しい」と仰られたそうです。

また眼の不自由な老師は、「わしの字は釘の折れたような字だが、床の間に飾ったらちゃんとする。書家の字は床の間に掛けると床に負けて字が死んでしまう。」とも言われ、いつも筆で字を石に刻むように、全身全霊を込めて書かれていたとのことであります。



床に負けて字が死んでしまう。」とも言われ、いつも筆で字を石に刻むように、全身全霊を込めて書かれていたとのことであります。



ます。

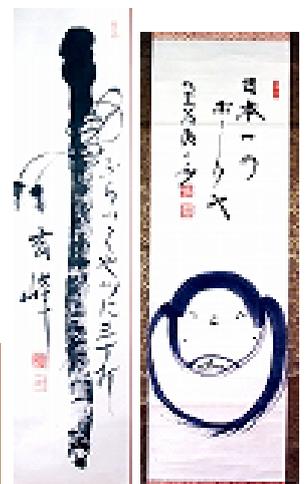
作品について

玄峰老師は求めに応じて気軽に書かれたようです。

龍澤寺出入りのクリーニング店の求めに応じて書かれたのは「洗心舎」です。

檀家の男児が誕生した時の祝いに書かれた「日本一のボーウヤ」では赤児の顔が何とも微笑ましく描かれています。

そうかと思えば、「ふらつくやツに三十打」では書の中から警策棒が飛び出し、したたか打たれそうな凛とした厳しさを持っています。老師の口癖は「陰徳を積み」「性根玉(しょうねだま)を磨け」でありましたが、



この書は「性根玉」をはっきりさせるために書いたものだと言われています。

「寿」(冒頭写真)は昭和28(1953)年4月12日に開催された米寿祝賀会にて揮毫されたものです。当日出席予定者が250人に対し、それを大きく上回る約400人が龍澤寺を訪れ、式典の後、模擬店や演芸で大いに盛り上がったといわれています。ぎっしり寄せられた署名が、参加者の多さを物語ると同時に、これだけ多くの人々が玄峰老師を慕っていたことがわかります。

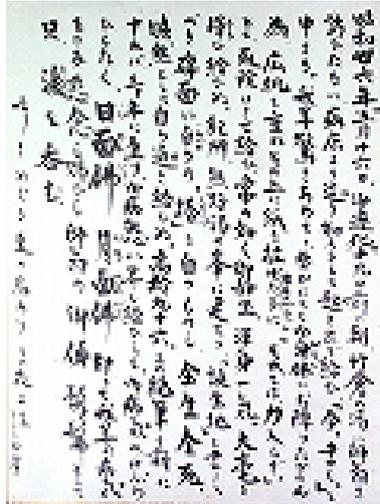
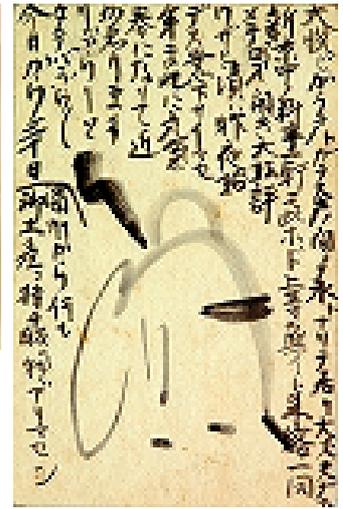
玄峰老師の人々への暖かい眼差しは、はがき一枚にも現れています。さりげない文面の中に相手を思う気持ちが込められているのです。老師が人々から慕われる理由はこんなところにあるのではないのでしょうか。

「母」(冒頭写真)は92歳、晩年書かれたものです。玄峰老師は「母」という言葉を口にしても涙ぐむような方であったといいますが、育ての母、岡本とみえは幼少の芳吉に対し、とても優しくかったようです。この書には、そんな「母の心」が込められているように思われます。

圧巻なのは入寂の二週間前に書かれた「玄峰塔」で、絶筆といわれております。玄峰老師は「わしが死んでも、墓や塔を建てるな。」と常々言っておりましたが、これは生誕地の湯の峰温泉に塔を建てたいという信徒の要望に折れて書かれたものです。揮毫の際には筆が置にくい込んだといわれており、近くで様子を見ていた人は、その気力に身動きできなかったそうです。

昭和36年6月3日夜、猪口に一杯のワインを飲み干すと「旅に出る、支度をせい。」こう言い遣して老師は旅立たれました。

遷化後45年を迎え、残念ながら玄峰老師の生前を知る人も少なくなりましたが、老師の書は、今なお人々を魅了し続けています。



企画展関連講座「江戸時代の小説と地方」

平成 17 年 11 月 26 日（土）13：30～16：00 参加者 47 人

講師 大高洋司氏

勝又基氏（明星大学日本文化学科 専任講師）

会場 三島市民文化会館大会議室及郷土資料館企画展示室

「勝俣文庫について」講師：勝又基氏



要旨「郷土資料館所蔵の勝俣文庫については、国文学研究資料館により 10 年ほど前から調査を行なっています。調査は蔵書印・書き入れからの情報と小説を手がかりとした調査方法です。今までの研究者は滝の本連水と俳諧について注目していましたが、この長期にわたる調査によって、勝俣文庫は小説も相当数あり、江戸時代後期の小説コレクションとしても十分に貴重です。ほかにも、随筆、歌書などが多くあります。勝俣文庫は連水の俳書で著名ですが、もうすこし広く、文学を好んだ家の文庫として考えなおす事ができます。また連水自身の購入した書物は少なく、知人の医師からゆずり受けた物が多いようです。また書き入れや蔵書印を見てみると、父・常昭や息子・清作によって購入されたものが多い事が分かってきました。

今後も勝俣文庫の調査を継続するとともに、貸本屋「本源」の存在を中心とする静岡県東部の書籍流通、連水の俳業の再評価と幕末～明治初期の俳諧ネットワークにおける「俳関」としての役割を紐解いていきたいと思えます。」



「江戸時代の小説と地方」講師：大高洋司氏

要旨「江戸時代の小説「戯作」は江戸中期から作られはじめた、洒落本や黄表紙、滑稽本、人情本などの大衆文芸をいいます。

戯作は江戸の知識人の仲間内の文芸としてはじまり、江戸市中に限られた内容となっていました。寛政改革を経てからは、読者層が急激に拡大し、作者自身が楽しむそれまでの作風とは変わって、もっぱら読者に楽しみを提供するという姿勢が顕著になりました。その頃の作者としては曲亭馬琴、十返舎一九、式亭三馬が知られています。

読者層が地方に広まったことで、それまでの江戸の優位性を描いていたものが、『膝栗毛』では、弥二さんの江戸っ子気質が地方でやり込められるように描かれています。

また、『八犬伝』では八人の犬士を探す旅で日本各地を登場させ、それぞれの土地柄についても詳細に描写し、全国的な読者を意識していたことがうかがわれます。

当時一般読者は、主に貸本屋から借りて読み、読者層の広がりとともに地方の貸本屋業も盛んになり、出版元に対し多くの作品の出版を迫りました。

この戯作文学は、明治以後の近代文学へとつながっていきました。」

講演終了後、郷土資料館へ移動し、勝又講師からそれぞれの展示資料についての作品解説が行なわれました。



徳川将軍を支えた三島にゆかりの女性 お万の方

(1580 - 1653、別称：蔭山殿、法号養珠院)

お万は、里見家の家臣上総(千葉県)勝浦城主正木頼忠と、北条氏隆の女との間に誕生しました。

天正18年(1590)、豊臣秀吉による小田原攻めが開始された際、勝浦城も攻められました。やがて城は炎上し、お万は母と兄二人とともに海に逃げ延び、縁を頼って加殿(伊豆市)の妙国寺に身を寄せました。正木頼忠は討ち死にと聞き、母は河津城主蔭山利広に再嫁しお万たちもここで養育されました。

徳川家康が江戸に入府して数年後、お万は徳川家康の側室に迎えられました。養父蔭山氏広の出自をたどると、鎌倉公方足利氏広にさかのぼるといふところに、関心が向けられたともいわれます。

お万は「お万の方」と呼ばれ、家康に大事にされ頼宣(紀州家祖)と頼房(水戸家祖)をもうけました。徳川宗家の血筋が絶えた後、紀州徳川家から吉宗が八代将軍として入り、以後十五代慶喜まですべてがお万の方の血筋を引くこととなります。

お万と徳川家康の出会いの地については、「三島宿通行の際に宿泊した本陣」「鷹狩りの帰路」など諸説があります。

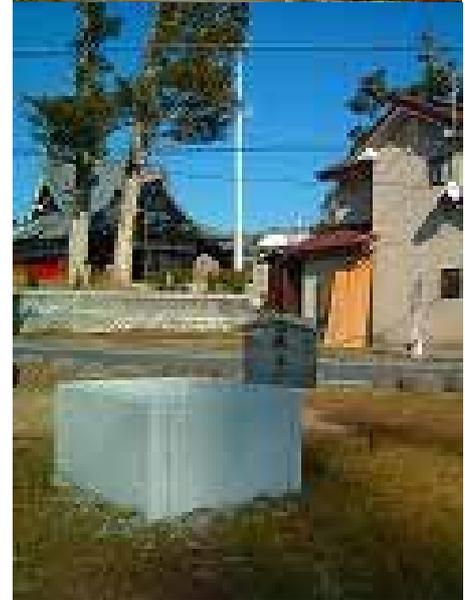
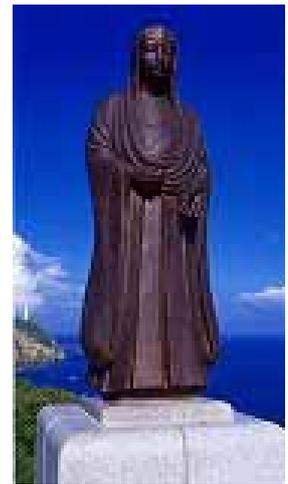
お万と家康の出会いの伝承のひとつに、伊豆で家康の休息中、お茶を差出したお万は家康から身元を尋ねられ、「伊豆韮山の代官・江川太郎左衛門の親戚で、父母に別れてから駿州大平村の郷土 星谷家で養育されています」ととりつくろったそうです。

しかし、家康はお万の所作や問答から高貴な素性を見抜き、側室として召抱えたということです。

妙法華寺は弘安7年(1284)に鎌倉に建立されましたが、その後戦乱にさらされ文禄2年(1593)加殿妙国寺に入りました。その後日産上人は、妙法華寺の新しい場所として大木沢の地を見つけ、ここがのち日達上人により玉沢と命名されました。妙法華寺の移転に際し、信仰心の厚いお万の方は、同じく家康の側室お勝の方たちと共にたいへん力を尽されました。

寛永2年(1625)玉沢全地が二代将軍秀忠の朱印地境内として寄進され、下乗の札が下されました。この下乗の札は当時徳川御三家のみに立てられたものです。

妙法華寺には、お万の方お手植えの桜が今に伝わっています。



寄贈資料

平成 17 年 10 月から 12 月までの間、次の方々から資料をご寄贈していただきました。御礼申し上げます。

(敬称略)

池田恵江 (芝本町)

硯箱 李王賞

第二尋常高等小学校 1 点



内田宏昭 (東本町)

たらい 2 点

鏡台 1 点

煙草盆 1 点

針箱 1 点

金庫 1 点

ほか

高橋勝郎

竹かご (泉町)

昭和 21 年 2 点

近刊案内

『三島宿本陣家史料集 (18)』

三島市指定文化財 世古家文書史料

世古家は江戸時代、三島宿の本陣として樋口本陣と相並ぶ由緒ある旧家でした。

現存する古文書は本陣関係文書のみならず宿運営・助郷等交通史

解明に関わる様々な史料を見ることができます。天正期の北条家朱印状を初め、慶長・寛永といった 16 世紀末から 17 世紀中頃までの近世初頭の文書が含まれています。

これらの多くは昭和 7 年刊『静岡縣史料第一輯』にも収録されている学術的にも価値の高いものです。

もう一方の本陣樋口家の古文書は、既に昭和 45 年に市指定文化財『樋口家所蔵 三島宿本陣関係資料』として指定されていますが、世古文書は樋口文書を補い、また相互に補完する貴重な史料です。

B 5 判 88 ページ 頒布価格 1400 円



企画展図録「山本玄峰老師」

今回の企画展に合わせ、図録を発行します。内容は展示作品の紹介と「玄峰老師の生い立ちと書について」



「玄峰老師年譜」などが盛り込まれています。この機会にどうぞお求め下さい。

A4 判 64 ページ (巻頭カラー) 頒布価格 600 円

郷土資料館にて販売中

